法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

特集私たちのみた世界 : アジアのプロフイル : 1.ゆきずりの人びと : ボンベイ

福士, 稠子

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
8
(開始ページ / Start Page)
47
(終了ページ / End Page)
49
(発行年 / Year)
1967-03-21

アジアのプロフィル

1．ゆきずりの人びと　－　ボンベイ　－

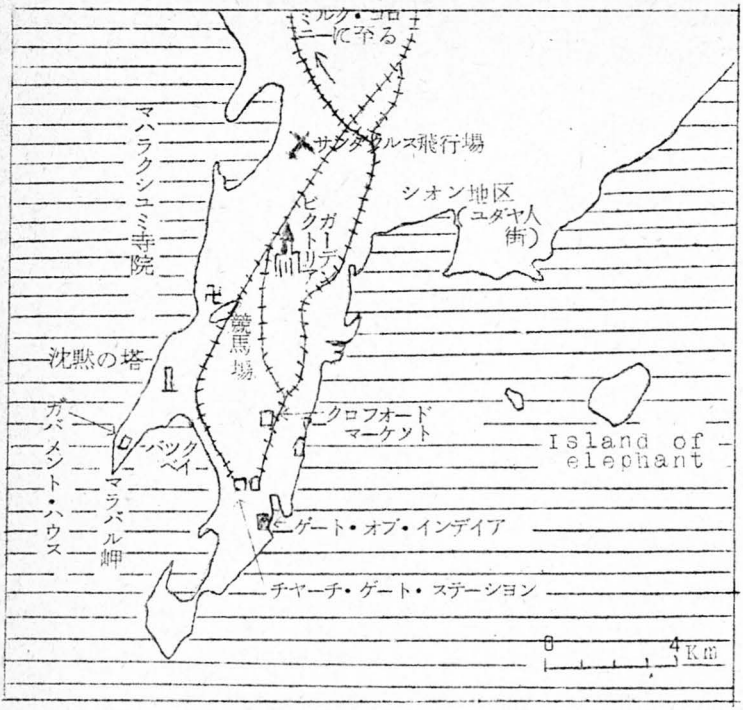
今夏ヨーロッパ旅行の途上、２日間だけボンベイに立ち寄つた。他の国ぐにの町と同様、ここも素通りではあつたが、あえてボンベイのかいまのぞ記をかくことにしよう。

羽田～ボンベイ間約１２時間。ボンベイ空港から真夜中の道を市街のタジマハル・ホテルへ。雨上がりの暗闇を通して軒下にねそべるインド人をみて異様に感じたが、翌朝何気なく窓を開いてハッとした。それはホテル前の大通りの向こう側に建つているインデイアンゲイト（１９１１年、イギリス王夫妻上陸記念の門で内部は６００人収容のホールになつているとのこと）付近にたむろする５、６０人のうつろな若者達をみたからである。その日は７月３１日の日曜日であつたせいかどうか、朝早くからどこからともなくホテルの前に集まつて来た若者たち。かたわらでは、ホテルの窓々にむかつてしきりに上衣をまくつて自分の肌をちらつかせては投げ銭を期待し両手をふり上げる７～８才の女の子。怪しげなアクロバットをやつてはおじぎをして帽子をふり廻す父親と５～６才の男の子。母親の背中で母親と共にそのやせた小さな手をさしのべてはおじきをする赤ん坊。コブラをひらりひらりとみせてはホテルに向かつてしつこくお金を要求している老人。さすがの私も朝食前にそのインデイアンゲイトへ行くどころか、ホテルから一歩もでられない。じつと外の様子をみつめるのも気がひけるほどであつた。

イギリス貴族好みと思われるホテルの豪勢さもそこに働らく人々はやはり日本とは趣が異なる。庭の刈りこみ手入れをする人、草むしりをする人、コンクリートの床をはくだけの人。玄関に立つだけの人、廊下のすみずみにたつだけの人。へやの中に出入りできる人。さらに特別室のルーム・メイドなど。それぞれの制服がちがうだけでなく、それらの人々はお互いの存在は眼中になく、自分の持場だけを固守しているようなのである。外車でホテルにのりつけ、じゆうたんをしきつめた階段を鷹揚にのぼり、楽団の演奏をききながら、たべ放題のバイキングの昼食を楽しむ恰幅のよいインド人たちは、また、周囲の労働しつつあるインド人たちとは根本的に人種が違うとでもいうようである。

これらのことについては、プリンス・オブ・ウエールズ博物館の解説によつても少しはうなずけた。それは何千年のインドの歴史の中でインド人を構成する幾多の人種は、それぞれの先祖が根本的に立場を異にするものとして、他地域からこのインドの地にすみつき、バラモン、クシヤトリア、

ボンベイ市図



バイシア、スードラを初め33種という複雑なカーストを成立させたものである、と説明されていたからである。

ホテルの外にあつては、腕時計を持つている人、カメラを持つている人、ましてや自分のスクーターを乗り廻すことの出来る人などは非常なエリートらしく、そのスイス製時計、日本製(?)カメラを大げさに誇示し得意満面に話しかけてくるのである。偶然、カラマネール公園の花時計の前で出合つたこれらの人たちは、場所ははつきりしなかつたが、何でも国土建設の為のダム工事現場で技師として働いているとのこと。インドにおける現場技師というものを改めて見直した。住宅にしても、国家の官僚機構の中での超特権階級者には、市街地からハイヤーでたつぷり30分以上はかゝるマラバル岬の絶景の地に別荘風の高級官邸があるとのこと。毎日の通勤に要する時間などは全く無視しての国家からの提供であろう。かつてクイーン・ネックレスといわれ、イギリスのボンベイ支配の象徴であつた海岸ぞいのビルディング。イギリスがひきあげてから20年をへた現在では、その後全く手入れがなされなかつたかのように壁はおち、ペンキははがれ、窓も戸もこわれ放題の荒れかたである。そしてそれはやがてさらにおそまつな二階だての商店街へとつゞいている。ウエスタンレールウエイのふみ切りを横ぎるとき、ふと車の中から窓の下をみたらその鉄道用地の柵の中に、こうもりがさをひろけたような真黒い布がやね状にひろがつているのをみた。ちようど、ベドウイン婦人の黒いチャドルをそのままやねにしたようなテント張りである。これらのジプシーの一家が、ホテルの前でおじぎをくり返しては投げ銭を期待し、まただれかれとなく袖をひつぱつてはおめぐみをと手をさしのべているのである。ラテライトのデカン高原の崖状の近くでは、その赤土を固めて作つた家とか、おだんごをふせたように低いわらぶきの家などが部落をなしているところもあつた。このような住いでは、大勢の家族が窮屈な思いをしているより、他人の家の軒先にね

た方が、気持がよいこともあるのであろうか。

ボンベイ市立の遊園地としては、ミルクコロニーにいく途中の人里はなれた丘の上に、広大な敷地をもつものがある。そこでは少しも貧者に妨げられず、裕福な親たちに見守られて子供達はのびのびと遊園の施設を楽しんでいた。同じ市立でも、市街地の外れには2、3百人用の共同洗濯場もある。一見それと分からぬがそこでも完全な分業組織が確立されている。すなわち洗濯物を運んでくるだけの人、洗うだけの人、干すだけの人、配達をする人などである。これを知つて改めてそのあたり、自転車に山のような衣類をつんで往き交う人々を見直したものである。

クイーン・ネックレスのマリン・ドライブウエイにおいても、たゞ防波堤によりかかつているだけの若者たちが海岸ぞいに長い列をなしている。その4～5mほどもある広い歩道の片隅では、一鉢ほどの売るものを並べてしやがみこんでいる7才ぐらいの子供たち。ともかく港町ボンベイには終戦当時の上野の山のように、インドの各地から食いはぐれた浮浪者が何となく集まるとのこと。それにしてもあちこちに展開する放置されたままの広大な土地。イギリス資本による臨海工業地帯はあるのに、若者たちの働らく場所をもたないボンベイ。それでも兵隊になれる程の人は選ばれた階級の子弟であり、ベトナム派兵も行なわないインド。或いはそこにガンジー首相の心意気もあるというのであろうか。

そういえば四億の民をかかえたインドでは最近政府による家族計画指導が徹底しているともきいた。なるほどひたいに赤丸をつけている程の婦人では、三人の子持ちというのを殆んど全くみかけなかつたのも印象的であつた。それがパリでみかけた若い夫婦が子供三人づれなのと妙に対照的に思い出される。

大家族制といい、カースト制というのも、今日のインドの現実をなさしめたすべてではないと思うけれど、やはりその前途は多難であると思われてならなかつた。

東京都中野区立第八中学校　福士稠子

2．The Land of Smiles　－バンコク－

The land of smiles と称されるタイ国は、メナムチヤオプラヤ（メナム川）の沖積平野の豊かな水田にみのる米を才一の産物とする農業国であり、「王様と私」に描き出された東洋の神秘な王国というイメージとワツト（寺院）とクローン（水路）に満ちた美しい首都クルンテプ（バンコク）とによつて、観光客をひきつける観光国でもある。さてそのsmileとはどのようなものであろうか。

雑踏のない観光都市―騒音とわい雑な活気に満ちた東京と香港をあとにたどりついた夕暮のバ